

「新しい東北」官民連携推進協議会
令和２年度 宮城県意見交換会（第１回） 議事概要

令和２年６月１２日

「新しい東北」官民連携推進協議会事務局

【日 時】 令和２年６月１２日（金）１０：００～１２：００

【場 所】 復興庁 宮城復興局 １３階Ａ大会議室 ／ 復興庁本庁 会議室

※上記２つの会議室に分かれ、テレビ会議を実施

【出席者】

＜副代表団体＞（順不同）

株式会社七十七銀行、国立大学法人東北大学、復興庁総合政策班、復興庁宮城復興局、
宮城県、一般社団法人みやぎ連携復興センター

＜オブザーバー＞

独立行政法人中小企業基盤整備機構

＜事務局＞

PwC コンサルティング合同会社

【議事概要】

１ 開会

１．１ 開会の挨拶

今年は東日本大震災から１０年の節目であり、今後を展望するいい機会である。制度面でも復興庁設置法が改正され、復興庁の延長が決まった。この協議会が継続して被災地の復興に貢献していくため、引き続きご協力を賜るよう、復興庁より挨拶した。

２ 各団体の取組紹介

各参加団体より、取組紹介資料（資料２-１以降）をもとに取組を紹介した。

３ 「実践の場」開催報告

事務局より、事務局提出資料（資料１-１）をもとに以下の点を説明した。

- ① 今年度の意見交換会の方向性
- ② 今年度の意見交換会の進め方
- ③ 実践の場の企画背景

４ 実践の場の企画案の説明

事務局より、事務局提出資料（資料１-１）を元に、現時点での実践の場の企画案を説明した。

5 意見交換

実践の場は、東日本大震災から今までに実施した取組を振り返り、成果をまとめると共に、現在進行形の復興活動や今後の災害対応等に資するノウハウ・将来像の検討を行うことで目的を決定した。その際に、過去の震災の課題を乗り越えた点だけでなく、乗り越えられなかった点や、新たに発生した課題にも着目し、今後への活かし方を考える。また、グループワークのテーマは被災者支援・産業支援・まちづくりで合意した。どのテーマにおいても、復興に向けた取組をリードする核になる人、核になる人からの横の繋がり、活動を継続するための仕組みの3点を形成することが課題であり、ノウハウとなり得ることを確認した。

<主なご意見>

- ・ 今年度は東日本大震災から10年の節目であり、これまでの振り返りは必須である。その上で、振り返った内容を未来に向けて発信したい。加えて、県内だけでなく他地域への発信を意識した方向性が合っていると思う。
- ・ 10年の節目にあたって振り返りは重要である一方で、10年経過し震災以外の新たな課題も見られている。新型コロナウイルスの影響もある中で、新たな価値観を踏まえた未来型の発信ができるとうい。
- ・ 昨年度の実践の場は東松島で実施され、そのフォローアップも必要だと感じている。そのため、今年度の企画案の中心に据えるというよりは、連携推進や展望の発信をする中で昨年度の取組も含めていければと思う。
- ・ 振り返りをするのであれば、上手いかなかった事例から学び、次に繋げることも必要と考える。実際、被災者支援を行う団体などは、震災から11年目以降の活動継続が喫緊の課題となっている。「新柄コロナウイルス感染拡大への対応及び支援に関する宮城県内NPO法人緊急アンケート」の結果からも、NPOは新型コロナウイルスの影響を受けて厳しい状況にあることが分かった。過去を振り返ってから、今後の活動にどう活かすか考えていきたい。
- ・ 連携推進を切り口にこれまでを振り返るのは協議会の目的に合致している。一方で連携推進の切り口から議論を始めるのは難しい。被災者支援・産業支援・まちづくりという分野に対して、団体ごとに議論しやすいテーマから連携推進に入るとよいのではないかな。
- ・ 過去・現状を振り返り、未来へ繋げていくという大きな方向性に異論はない。ただ連携という切り口から始めると、連携が大切だという共通認識はあるものの話が具体的に難しく、どう焦点を絞って個別具体的に議論を深めるかが肝心である。
- ・ 震災を経験し、実際に各団体が努力をしてきたことが最も得難い経験である。具体例を取り上げながら議論することを期待したい。
- ・ 素案の3つのテーマは令和3年度以降を見据えた内容として適すると思う。
- ・ 銀行も地方創生を考える際に、「まち・ひと・しごと」の枠組を用いることが多い。素案の3つのテーマはこの枠組みにも合っており、将来的な地域の活性化に向けた要素が盛り込まれていると考える。
- ・ 産業支援分野のパネルディスカッションでは、「結の場」の大手支援企業をパネラーとすることを素案の一つに考えている。「結の場」を取り上げることは、連携という切り口にも相応

する。

- ・ 水産関係者もパネラー候補に考えている。これまでの取組や 11 年目以降の展望を聞くことで、参加者に気付きを与えられるのではないかな。
- ・ 震災以前は、漁業の分野と他の分野の方が連携するということは少なかったと思う。一方、県外からボランティアとして支援にやってきた方が、支援活動をする中で、地元で頑張っている漁業者と出会い、一緒に活動する中で、支援者、漁業者、石巻市、宮城県との繋がりが生まれ、また支援者が頑張っている姿に感化されて漁業事業者が奮起したことで連携が始まった事例もある。このように新たな出会いから新たなアイデアが創出され、上手く事業が回っている点がノウハウだと思う。
- ・ 被災してボランティアを含む多様な方との関わりが生まれたことを契機として活動が広がったことが分かった。これは産業支援や産業発展のノウハウになり得る。
- ・ 被災者支援の分野も幅広いため、素案では県域の中間支援団体にテーマを絞ったのだと思う。時間も限られているので、テーマを絞った方がメッセージを伝えやすい。
- ・ 近年、中間支援団体に期待を持つイメージがあるが、中間支援を専門にした団体があるのではなく被災者支援を行う団体が手を取り合い、中間支援を行っている。中間支援団体が NPO や被災者支援の取組を引っ張っているイメージを与えると実態と異なるため留意が必要。課題は中間支援の役を誰が担うかである。
- ・ 被災者支援などの取組が活発な石巻は、若い人が率先して活動していることが特徴である。首都圏など地域外からボランティアで石巻に来た若い人が、その後、自ら起業する、被災者支援を継続する、結婚して定住するなど様々な形で活躍している。
- ・ 新型コロナウイルスの影響で従来の対面での支援ができず、被災者支援に苦労している。現在の支援の課題も論点として取り上げてもらいたい。
- ・ まちづくりのハード面は国から予算がついていたこともあり一定程度復旧が進んだが、今は財政の健全化に課題認識を持つ自治体が多い印象である。
- ・ 防災 ISO では災害への対応力が高いコミュニティの基準をどう作るかを考えているため、まちづくり分野ではインキュベーション的な観点から連携できるように思う。
- ・ 震災から 10 年経ち、震災疲れやリーダーの交代が起きている時期なので、取組の成功事例を取り上げるだけでなく継続させる仕組みも提案できればよい。
- ・ 9 年間で蓄積した全ての題材を扱うことは難しいため、まちづくりであれば防災に絞るのはよいと考える。まずは直接携わった宮城復興局がイメージしやすい題材にすれば、実践の場も意義深くなるのではないかな。
- ・ 防災に絞る点は賛成である。東日本大震災の被災の経験・教訓がある中で、ノウハウの伝承は一つの切り口となる。震災から 10 年が経ち上手く伝承されたかという課題もある。伝承という課題を相互連携という切り口で解決できるという打ち出し方も考えられる。
- ・ 震災を契機に新たな接点生まれ、率先して取組を行う人が登場しており、活動を推進・継続する枠組が必要となることは各分野共通だと感じた。率先して行動する人はこのように登場したなど、各分野での具体的な事例があるとノウハウとして発信でき、議論もしやすい。
- ・ 阪神淡路大震災を始め過去にも大きな災害があったため、災害対策や復興の課題は分析され

ているのではないか。そうした過去の課題を乗り越えた事例を示せると、より具体的に議論ができると思う。

- ・ これまでの議論では、取組をリードする核になる人、核になる人からの横の繋がり、取組を継続するための仕組みが課題に挙がっている。これらの課題を乗り越えてきた事例があると議論が進みやすい。
- ・ 東日本大震災で中間支援団体が偶然できた訳ではなく、この仕組みがあった方がよいという問題意識から生じている。過去の経緯を総括して、次の災害に活かしていきたい。
- ・ 被災者支援は過去の震災を踏まえて制度的にも改良されてきたが、それでも課題は残っている。過去を振り返る場合、課題を解決したことを評価しつつ、依然として残る課題も今後の連携に資する情報として発信すべきである。
- ・ 昨年度の台風、暖冬、新型コロナウイルスのような新たな課題にも対応するノウハウにできればと思う。
- ・ 新型コロナウイルス影響下の「新しい生活様式」は意識する必要があると思う。震災の経験・知見を今後の災害にどう活かすかという観点はあってもよい。
- ・ 新型コロナウイルスの影響次第で秋頃の実践の場の開催形式や規模等が不透明な部分もある。現時点での宮城の状況や開催に向けて注意すべきことがあれば教えてほしい。

6 閉会

第2回意見交換会では実践の場の詳細について具体化を進める。8月～10月頃に開催予定。事務局より別途、日程調整を依頼する。第2回意見交換会には連携対象団体にも参加いただけるよう調整を進める。意見照会を行う際にはご協力をお願いしたい。

以上